街道をゆく

十五

街道をゆく 十五

司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和五十六年 七月三十日 第一刷発行

街道をゆく 十五

定価 一二〇〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 初山有恒

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五―三―二
電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

©司馬遼太郎 一九八一年

0326―254715―0042
Printed in Japan

街道をゆく　十五

本書には「週刊朝日」昭和五十四年一月五日号・連載第三百七十六回から同年七月十三日・第四百三回までを収録。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

北海道の諸道
函館 7
道南の風雲 21
寒冷と文化 35
高田屋嘉兵衛 49
函館ハリストス正教会 73
松前氏の成立 87

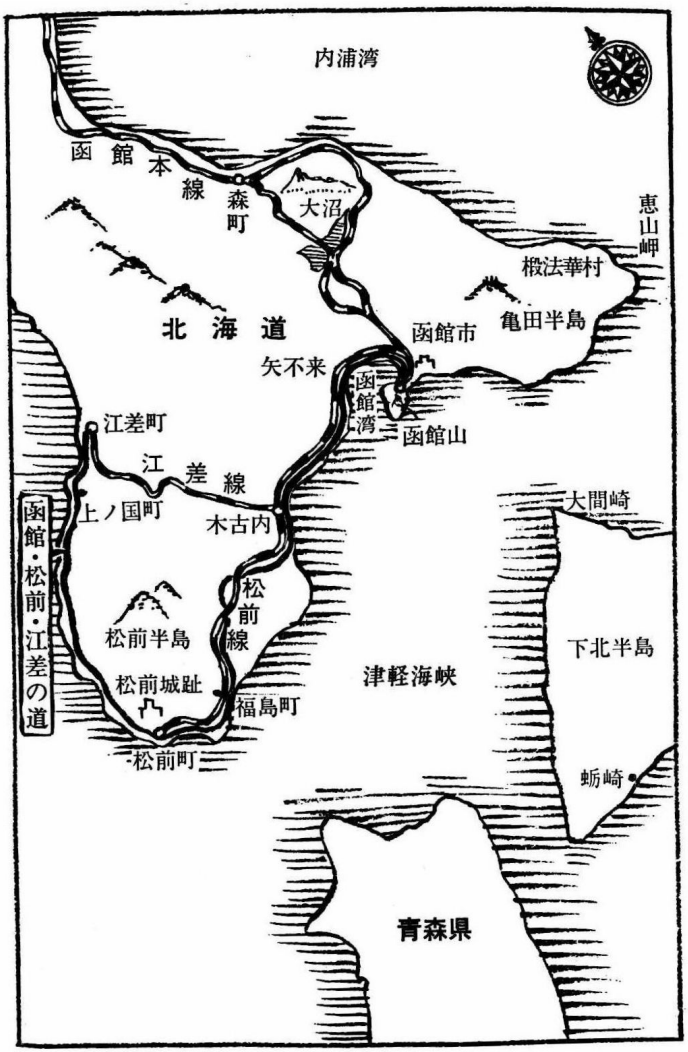
蝦夷錦 101
松前の孟宗竹 115
最後の城 127
レモン色の町 141
開陽丸 155
政治の海 179
開陽丸の航跡 191
江差の風浪 205
海岸の作業場 219
札幌へ 233

住居と暖房 247
札幌 261
厚田村へ 275
崖と入江 289
集治監 303
新十津川町 317
奴隷 331
屯田兵屋 343
関寛斎のこと 357
可憐な町 369

題字＝棟方志功
え　＝須田剋太
装幀＝原　弘
地図＝熊谷博人

函

館



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この九月、北海道の道内を転々とした。

旅の道順では道南が後半になったが、後半から書きはじめたい。

釧路では朝が肌寒いほどだったが、町のはずれの台上の空港にゆくと、まだ夏雲がのこっていた。そのくせ、風だけは秋のにおいがしていた。釧路から千歳で乗り継ぐ函館ゆきの便に乗ったとき、

「十月に来るべきだったわね」

と、後ろの座席で、初老の婦人が、おなじ年格好の同性に話しかけているのがきこえた。十月ならオロフレ峠あたりの原生林の黄葉がすばらしかったろうという。

この会話が、私には辻占(つじうら)のようにきこえて、気味わるかった。似たような言葉を、二十一年前、津軽海峡の上空で故今東光氏がいったのをおもいだしたのである。今さんは前の座席から身をねじって、

「おえ」

といった。

「函館のあと、オロフレ峠へゆこうよ。今頃、すごい黄葉だぜ」

その旅は、函館が目的地であった。

今さんが『お吟さま』という小説で直木賞をもらったのはその前年――昭和三十一年――だ

ったような記憶がある。当時、私がつとめていた新聞社がこの人に小説の連載をたのんでいて、その取材のために担当者の私が同行させられた。

今さんは、幼年時代の一時期を函館ですごした。

「函館にプロテスタント系の遺愛女学校というのがあってな。おれはその付属幼稚園に通っていたんだよ」

今さんは一八九八年のうまれである。このときすでに数えて六十だったと思うが、この人が可愛いスモックを着て幼稚園に通っているというのが、なんとなくおかしかった。

「日露戦争がはじまった年だよ」

私が幼稚園に入ったのは昭和恐慌のころで、今さんとは二十五歳離れている。

このときの函館ゆきは、思い出が多い。

大阪から羽田まで日本航空の便で行ったが、私は飛行機がはじめてだったし、今さんのように世間のひろい人でも、二度目だった。

「あれは、窓から顔を出すと、あぶないんだよ」

と、しきりに言っていたのは、若いころ、代々木の練兵場で小さな練習機が飛びたつのを見たときの目撃談で、その練習機に乗せてもらっていた今さんの友人が、地上の今さんに手を振

ったところ、風圧で腕が顔にくっついて離れなかったという。本当かなとおもったが、今さんの仕方噺をきいていると、本当でないほうがおかしいようにおもわれた。

たえず好奇心で頭が疼いているような人で、はじめて旅客機に乗ったとき、通路を歩きまわって操縦席にまで入りこんで、操縦士にあれこれと質問したという。

「おきよのやつが心配しやがって」

夫人の名である。

「落ちるというんだよ、運転している人が気が散って、そのため万が一のことになっちゃ、人様にご迷惑をかけるじゃないか……」

だからこんどはおとなしくしているんだ、といって、座席にすわると、手を左右に動かしてベルトを締めた。私が無器用でうまくベルトを締金具に入れられずにいると、病人を見るような目で同情して、

「おれの弟に文武というのがいるんだよ。風呂敷が……こう」

と手まねをし、結べないんだ、といってくれたりした。私は風呂敷のほうは結べるのである。

当時、日航機の機内の壁にこの会社の社章である鶴の定紋風の絵が装飾として描かれていた。はねをまるくひろげた形で、日本の定紋でいう「鶴丸」に似ており、壁のあちこちに散らすようにして描かれている。今さんは強度の近視である。好奇心が脹らんでくると目までふく

らんでくるようで、その絵に顔を近づけてじっと見ていたが、やがて通りかかったスチュワーデスをよびとめ、

「なぜおれの家の紋がここに描いてあるんだろう」

と質問した。

スチュワーデスがどう応答したかわすれたが、彼女が立ち去ってから、今家の家紋のいわれを私に話した。何代か前の人が功によって藩主からこの定紋を頂戴したという。そういえば津軽の殿様の定紋は鶴丸である。しかしそれにしてもこの人の自我の質量は日本人離れしていて、たいていの事物は自己の同心円のなかに入ってくるようであり、入らない事物があればそれは敵意という色で染色された。このことは今さんの小説のなかでの人間描写の鮮明さと無縁ではないかもしれない。

羽田でいったん降り、空港の片すみの格納庫へ行って、六人乗りの小さな飛行機と乗りかえた。

「小さな飛行機に乗ろうよ」

と、今さんは出発前に希望したために、その当時、私の会社が持っていたそういう飛行機をつかうように手配されていた。いま乗ってきた日航機からみればオモチャのように小さく、色も子供がよろこびそうな緑色に塗られていた。双発だが、胴が小さく、飛びあがると、昭和十

年代のダットサンが飛んでいるようで、気味がわるかった。

「津軽海峡の雲が低すぎるそうですよ」

と、私は、出発のときに、航空部長が私に言いふくめたことを今さんに伝えた。あまりに雲が低ければ、この季節、この小さな飛行機ではどうにもならない、という。雲の中を飛ぶことになるが、夏ならともかく、十月という季節なら翼に氷がくっつくことがあり、そのために機体が重くなって墜ちるかもしれない、ときかされた。

「雲の様子をみて、もしだめなら青森県の三沢（みさわ）の米軍の空港にたのんで不時着するそうです」

この場合、航空用語として不時着が正確だそうである。ところが今さんの回路はべつなほうに電流が流れるらしく、

「三沢かい」

うれしそうに、

「あれは津軽（つがる）に近いんだよ」

と、いった。べつに豪胆な人ではなく、異常事態についての感受性が、どこかひととちがっていた。

結局、三沢の米軍の軍用飛行場に降りるはめになった。化物のように大きな軍用輸送機が何機も腹を地にすりつけるようにしてならんでいた。この人はそれをふりかえりふりかえりして

見て、ついには空港の柵によりかかって見、行きましょう、とうながすと、夢から醒めたような顔をしてついてきた。

その日は三沢の町の宿で一泊し、翌朝、津軽海峡を越えた。

津軽海峡は想像していた以上に狭く、下北半島の突端の大間崎をすぎると、対岸の北海道の海岸がみえて、大陸の大河の河口もこういうぐあいだろうと思われた。

「おえ、函館山だよ」

と、今さんは窓に顔をくっつけていった。函館湾を東から腕のように抱いている半島の先端にある山で、かつては要塞地帯だった。

私には、べつに感慨はない。

が、この人にとっては幼稚園時代にしばしば登った山らしく、格別な思いがあるらしい。

父武平は最後に日本郵船の欧州航路の船長となったが、勤めの関係で、函館、小樽、横浜、大阪、神戸と転々し……。

と、新潮社の『日本文学小辞典』の今東光の項にある。武平という人は明治の早々弘前を出て函館商船学校に学んだという。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com